

## 「知ること」と「教えること」

### 1. 教育を考える一言

「完璧と思えた時 それは実はスタートにしかすぎない」

### 2. 背景

城アラキ原作の「ソムリエ」という漫画のなかに出てくる発言です。

主人公がソムリエを務めるレストランに、20世紀最後と謳われる天才指揮者が10年ぶりの世界公演の最中に訪れました。主人公は、生まれが貧しかった天才指揮者に対し、高級レストランでありながらも家庭的な味を提供するというサービスを行いました。天才指揮者はこのサービスを褒めながらも、ホストテスト（主賓に対してワインの味を確かめてもらう行為）を行ったことに対して「まだ若いな」という発言をします。その後、自分が10年間活動しなかった理由（演奏に完璧を求めすぎたが故に観客を置いてきぼりにしていた）を話し、最後に上述の発言をします。

### 3. 考察

「ソムリエ」の主人公は、若いながらもソムリエとしては優れた能力を持っており、その能力は天才指揮者も認めるどころでした。しかしやや慢心気味であった主人公に対し、この発言をもって激励したと考えます。

教師が生徒よりも知識を持っているのは当たり前です。ある意味で、教室という狭い空間の中では、教師が一番の天才です。しかしそれで慢心して、自分の知っていることを話すだけの授業をしていては、生徒が置いてきぼりになってしまい、わかりにくい授業になっていると言わざるをえないでしょう。

もちろん、教師は多くの知識を持っていなければなりません。間違いなく、授業で話している内容だけを知っているというのでは不十分です。授業で話す内容に関連した内容はもちろん、時事的な話題なども、話す機会がないかもしれないにしても持っていなければならないでしょう。

多くの先生は、そのような様々な知識を得る努力をし、実際にたくさんの、完璧とも思える知識を持っていると思います。しかし、実はそれは「スタートライン」でしかないのです。

自分が知らないことを教えることはできないでしょうが、自分が知っているからといって教えられるとは限りません。完璧と思える知識をもって、それを生徒にどのようにして教えるかを考えて初めてスタートラインを出発したと言えるでしょう。そう言う意味で教師の勉強は、今までのテストの点を取るための勉強などとは大きく違うと言えます。

教師になった時点で、ある意味スタートラインには立っていると言えます。そこからスタートして、教師というゴールのないコースを走り続けましょう。

### 引用参考文献

城アラキ・甲斐谷忍『ソムリエ』6巻、集英社、1998年